エネルギーを見る眼

「イスラム国」の魔力と危険性

◉貧しい家庭に食糧や医薬品を届けることも

シリア内戦で化学兵器を使ったアサド政権攻撃を避けたオバマ米大統領が、「イスラム国」(IS) 空爆に踏み切ろうとしている。英仏などもISに対抗するクルド武装組織「ペシュメルガ」に武器供与を開始した。大国はようやく「イスラム国」の危険性に気付いたようだ。

イスラム・スンニー派過激組織「イラク・シリア・イスラム国」(ISIS) が、イラク北部からシリアにかけて急速に支配地域を拡大し、6月末にISを名乗り、指導者バグダーディが「カリフ」に就任したことを宣言した。この急膨張を敵対するクルド人日刊紙は「津波のごときIS」と称した。

7月には英語版月刊誌「DABIQ Return to Khilifah」(ダビク　カリフ制への回帰) を発行したが、そこで謳われた「カリフ制復活」はイスラム青年を惹きつけ、「サイクス・ピコ国境の破壊」という主張は、誇り高きアラブ人を鼓舞するだろう、と私はみた。

誌名のダビク (Dabiq) は、日本人には馴染みがないが、シリア北部の中心地アレッポの北100kmにある丘陵地帯。1516年夏、この地で“奴隷王朝”といわれたマムルーク朝と、新興のオスマントルコ朝両軍が激突した。

兵士の数では優るマムルーク軍は、騎馬武者が刀剣を振るうという古典的な戦法にこだわり、最新の火器を採用した寡勢のオスマン軍に大敗する。以後、マムルーク朝は衰退し、勝利したオスマン軍はアラブ全域から北アフリカ、そしてウィーンに迫る勢いで、20世紀まで続くカリフ制オスマントルコ帝国の基礎を築いた。天下分け目の決戦場の地名をISが機関誌のタイトルに選んだ狙いは、支配地をオスマントルコ帝国時代にまで拡大することのアピールだろう。

8月に第2号が発行されたので、ネットを開いたが、アクセス不能になっていた。公権力によってブロックされたのだろう。

(なぜ若者を惹きつけるのか)

ISがイラク第2の都市モスルで名乗りを上げたとき、構成員は5000人といわれた。それが瞬く間に2万人に4倍増した。数100人単位でアラブ、アフリカ、欧米、豪州からISに馳せ参じている。中には息子2人を同伴した父親もいるし、サウジアラビアの首都リヤドのモスク (礼拝堂) で指導的立場にあった青年説教師がISに加わり、ツイッターで若者たちに参加を呼び掛ける例も出てきた。

イスラム世界には神父、僧侶といった聖職者はいない。ウラマー (法学者) が金曜集団礼拝の際、日々の現象をコーランに照らし合わせて説く。親が子に伝え、先輩が後輩を導くのだが、いま、イスラムの若者たちは、幼児期から教え込まれたコーランの教えと現

最首公司　エネルギー・環境ジャーナリスト

1934年生まれ。56年上智大学新聞学科卒、東京新聞入社。中東、エネルギー問題を長く担当し、産油国首脳とも親交を結ぶ。現在、日本アラブ協会理事、GCC研究会を主宰。主な著書に『聖地と石油の王国サウジアラビア』『人と火』『水素の時代』など

実の乖離に悩んでいる。「自由」を求めて「アラブの春」を引き寄せたものの、後に現れたのは混乱と無秩序、内戦だった。進路を見失った若者に「イスラムの原理と力を見直そう」という、直截的で闘争的な運動と「イスラム国家」という名称は新鮮である。

イスラム急進勢力の政治目標は、西欧型の議会民主制でも、ナセルやカダフィ流の民族主義でもない。7世紀、預言者ムハンマドとその教友たちが築いた「イスラム共同体」であり、オスマントルコ帝国まで続いた「カリフ制」である。カリフ制とは、部族や国籍を超え、全信徒から選ばれた「カリフ」(預言者ムハンマドの代理人）による“過ち無き専制”である。

中東から北アフリカに及ぶ現在の国境は、第1次大戦の勝者英・仏が、敗者のオスマントルコ領を、石油や航路の利権を調整するために決めた。秘密裡に交渉した外交当事者の名をとって「サイクス・ピコ協定」と呼ばれている。これに英国がユダヤ資本の協力を得るために時のバルフォア外相がシオニスト運動の指導者ロスチャイルド卿に「パレスチナにユダヤ人のホーム建設」を約束した「バルフォア宣言」が、すべての中東紛争の根源である、とアラブの青年たちは理解している。

ISが機関誌名「DABIQ」で訴える版図は、サイクス・ピコ協定を無視するもので、アラブ・ナショナリストの発想を超えたものだ。イスラムに疎くてもアラブの若者の自尊心をとらえる力をもっている。同時にサイクス・ピコ協定に基づく中東諸国の現政権にとっては、体制破壊につながる危険思想である。

（戦力と財力を誇示するIS）

ISの魅力のひとつは待遇の良さにある。外国からの移住者には月額1000ドル、シリアの中堅官僚の3倍以上の報酬が支払われる。その財源は石油、身代金、略奪金などだ。石油は同じ過激派組織ヌスラ戦線が確保していたシリア最大の「オマル油田」（日量7万5000バレル）を、7月初めに奪い取った。その後、イラク北部で80カ所の油田を確保した。最近の報道によると、ISの石油生産量は日量7～8万バレルで、これをバレル当り重質油20～30ドル、軽視油50～60ドルで、シリアやトルコのブローカーに販売し、1日当たり100万～150万ドルの安定収入を得ているという。

この豊富な資金でほかの過激派から勧誘し、異教徒に対しては残酷な処刑で見せしめにする一方で、改宗した貧しい家庭には食糧や医薬品を無償で届け、独自に開設した学校に通わせる。国際社会は対IS共同作戦を開始したが、イスラム国内の貧富の差、先進国での宗教差別が無くならない限り、第2、第3のISが現れるだろう。

小島志塾　話題提供の概要　　2014年11月10日　最首公司

イスラム史の中の「イスラム国」その背景と魔力

1、中東の社会構造の変化

・部族と部族神

・部族社会というタテ糸とイスラムのヨコ糸

・政教分離のキリスト教（新約聖書ヨハネ14-33）

・政教合一のイスラム（622年メディナにウンマ・イスラミーア（イスラム共同体）

・最後の預言者・・・クルアーン第33章「連盟章」40節

・預言者の代理＝カリフ（カリファ）　正統カリフと通称カリフ→スルタン

・20世紀　オスマン・トルコ帝国衰亡と西欧による一方的な国境画定

2、イスラームの覚醒と挫折

・カリフ制（イスラム主義）の退潮と西欧植民地主義の進出

・神父・牧師に対するイスラーム主義者の抵抗・武力闘争　西欧の優勢

・若者を惹きつけた西欧文明・大量殺人兵器→西欧留学→植民地官僚→ナショナリスト（政教分離・反植民地主義）に変身

・イスラーム主義者とナショナリストの共闘と対立・抗争

・第二次大戦終結　ナショナリスト政権誕生→アジア・アフリカの年

・中東（パレスチナ）戦争（第一次～第四次）アラブの敗北とナショナリスト政権への失望

3、イスラーム主義者の復権と分裂

・1979年2月イラン・イスラーム革命、アラビア半島東部でデモ　11月メッカ神殿占拠事件、12月ソ連軍、アフガニスタン侵攻→欧米・アラブ穏健派がイスラム義勇軍を支援→アルカイダ組織化→武装勢力増殖

・1980年イラクがイランに侵攻→イラン・イラク戦争（シリアがイラン支援、イラク、サウジのシーア派首脳イラン亡命）→シリア・アサド政権はイラン支援（シーア派国家の連携）

4、イスラム復古派、急進派の源流

・ハワーリジュ派　7世紀　宗敵に妥協した第4代カリフ、アリーを暗殺

・イスマイル派ニザール派　12世紀　「山の長老」　暗殺者教団　ハッシシ→（大麻樹脂）→Assassin暗殺

・ワッハーブ運動　18～21世紀　アラビア半島中央部ネジド出身のアブドル・ワッハーブ唱導「原始イスラムに帰れ」　サウド家と同盟　第一次サウド王朝成立　イラク・カルバラ制圧、トルコ軍に敗れる　1901年サウド家リヤド奪回　サウジアラビア王国　同国“国教”

・マフディ運動　19世紀　スーダンでムハンマド・マフディ（救世主）主導の反英闘争（ゴードン将軍戦死1885年）キッチナー将軍制圧（1898年）約3年間のマフディ王国

20世紀　イラク・シーア派急進派ムクタダ・サドル師指揮する「マフディ軍」が反米闘争

・覚醒派　19～21世紀　ジャマルディン・アフガニー、ムハンマド・アブドー、ハッサン・バンナ（エジプト人教師）→ムスリム同胞団　→中道派、過激派（ジハード団＝アサド大統領暗殺）が分裂、統合を繰り返す・アルカイダ　21世紀　NYツインタワー攻撃　オサマ・ビン・ラディン、アイマン・ザワヒリ指　導　　→タリバン運動（アフガニスタン）、アラビア半島のアルカイダ、

ボコハラム（ナイジェリア）、イラク・シリア・イスラム国（ISIS）→「イスラム国」

5、急進派、過激派が目指すもの

・ジハード　アッラーの道への戦い→信仰の弱さとの戦い→多神教徒・異教徒との戦い

・ウンマの建設　シャリア（イスラーム法）を厳格に実行・実施する

・カリフ制への復帰　イラク・シリアの「イラク・シリア・イスラム国」（ISIS）と「ボコ・ハラム」がそれぞれ「イスラム国」宣言、タリバンの一部が「シスラム国」に忠誠宣言

5、第三の波と市民派の誕生・過激派の増殖

・タテ糸（部族）とヨコ糸（イスラーム）の表層に「ソシャール・メディア」というネット

・「アラブの春」で市民派、自由派登場

・「イスラム国」（IS）が活用する新旧メディア戦略（月刊誌「RABIQ」＆ソーシャル・ネットワーク）

6、アラブ・中東国家が当面する問題

・西欧発祥の自由、平等、博愛になじむか

・クルドとイスラム国の挑戦・・・サイクス・ピコ秘密協定＆バルフォア宣言の可否

・イスラム的民主国家のモデルはまだない

・中東のイスラム３大モデル国

①イラン・イスラーム共和国・・・最高権力者は法学者

②サウジアラビア王国・・・・・・国王はサウド家から

③トルコ共和国・・・・・・・・・・エルドアン大統領のカリフ志向

7、「イスラム国」とは　「脱法ハーブ」？

旧バース党が支援（サイクス・ピコ打倒＝アラブ・ナショナリズム鼓舞）

世界一リッチなテロ集団　資産＄20億　日収＄２～300万

外人部隊月給　＄3000（シリア中級公務員＄1500～2000）　花嫁斡旋＄1000

＊イスラム国批判

①クルアーンに規定されている「啓典の民」であり、保護民としなければならないユダヤ教徒やキリスト教徒を迫害し、追放すること。

②宗教的にはスンナ派もシーア派も、同じイスラム教徒と認められているにもかかわらず、政治的に敵対しないシーア派の一般庶民を異端として殺害したり追放したりすること。

③イスラム教徒の全員一致の合意のもとで選出されるべき「カリフ」を偽称すること。

④「捕虜は丁寧に扱うように」というクルアーンの教えに反して、見せしめの斬首などを行い、それを世界中に配信すること。

⑤国家建設に必要な「国土、国民、主権」のいずれもが不十分なままであること。

神聖な月が過ぎたら、多神教徒を見つけ次第に殺しなさい。また、彼らを捕虜にして閉じ込め、あらゆる策力をもって彼らを待ち伏せしなさい。しかし、もし、彼らが悔い改め、礼拝を守り、喜捨を差し出すなら、彼らの道を開いてやりなさい。実に神は寛容で慈悲深いお方である。（オーラン９章５節）　（了）

最首事務所レポート　2014－9－18

驕るなかれ「イスラム国」

「驕る平家、久しからず」・・・一見、昇竜の勢いの「イスラム国」（以下IS）だが、弱点も見えてきた。その第一は共同戦線を張ってきた自称「ナクシュバンディ教団」離反の兆候だ。

この教団は13世紀に中央アジアで誕生したスンニー派のスーフィー（神秘主義）教団で、16 世紀には中東から東南アジアまで広がった。イスラム法を厳守する点では IS と同じだが、布教、教導の方法が異なる。IS は公開処刑で想像されるように、強く厳しい言動で規範を示すが、後者は師弟同士が精神力を高め、以心伝心で教導する。神秘体験を共有するところから「スーフィー」に分類される。

この教団に旧サダム・フセイン政権の残党が潜入して活動していたことが明らかになった。しかもその指揮をとっているのが、米国が指名手配中のイザット・イブラヒム元イラク革命評議会副議長、フセインに次ぐNO.2の地位にあった人物だという。バース党はアラブ民族主義を掲げる政党で、イスラム主義のISとは相容れないが、シーア派偏重のマリキ前政権とシーアの別派アラウィ派のシリア・アサド政権は共通の敵になる。

IS の戦跡を辿ると、シリア内戦で先輩格のヌスラ戦線が抑えていたシリア最大のオマル油田を奪って資金源にしたあと、イラク北部の大都市モスルを制圧、別働隊は中部のティクリートを襲った。モスルはイブラヒムの生地といわれ、フセインの二男ウダイが一時潜伏していた地だ。IS の攻撃を受けたイラク政府軍は、米国製最新鋭兵器を捨て、軍服を脱いで遁走したが、旧バース党の影に怯えたのかもしれない。

もう一方のティクリートはフセインの故地で、バース党政権の恩恵を受けている。IS は占領地で診療所を設け、製薬工場を操業し、学校も建設するなど、従来の過激派にない行政能力を発揮しているが、これも旧バース党官僚が協力しているとしたらうなずける。この組織をISから離反させ、中央政権に引き込めるかどうかは、アバディ新首相の手腕にかかっている。

第二は主要なイスラム団体が「IS はイスラムに非らず」というファトワ（宗教令）を発したこと。サウジアラビアの大法官、エジプトのアズハル大学長、メッカに本部を置く世界ムスリム連盟などが、挙ってISを非難した。第三は国連安保理がテロ要員の渡航禁止を決議、加盟国に法制化を義務付けたことだろう。

だが、IS支援の動きもある。ナイジェリアの過激派ボコ・ハラムがISを名乗り、アルジェリアの過激派が IS 援護のため仏人観光客を殺害した。「欧米都市でのテロ」を宣言する新組織「ホラサン」の蠢動など、まだまだISは侮れない。